

——気候力学研究および大気海洋大循環モデルによる予測実験から  
2006年の夏以降の季節を予測すると——  
(あくまで研究開発段階のものであることに注意)

1) 熱帯太平洋のラニーニャで西太平洋熱帯域の対流活動が活発で、小笠原高気圧の強まるのが早かった(先の強い台風1号(最低気圧930ヘクトパスカル)はこのため)。それで梅雨入りが早い。過去のデータからもラニーニャ時には本州地域の梅雨入りは早まることがわかっている。このような場合には沖縄周辺では逆に梅雨入りは遅れる傾向になる。

2) 厳冬で日本周辺海域の水温が非常に低く、オホーツク高気圧も強くなることが予想されるため、今年は梅雨が強く、局所的に雷を伴う集中豪雨が予想される。しかも梅雨は長びくと考えられる。

3) したがって北日本は冷夏、西日本は猛暑の可能性はある。ラニーニャの時は一般には梅雨明けも早く、夏らしい夏に早めに入るが、今年は日本周辺の広い範囲の海域の水温が低く、そのようにならないであろう。北日本や東北の太平洋側では<ヤマセ>による冷害さえ心配である。

4) シミュレーターを用いた未来予測実験結果からはラニーニャは次第に弱まるが、インド洋にダイポールモード現象が起きて、これが西日本から沖縄、中国中南部などに厳しい早魃、猛暑をもたらす可能性が指摘されている(図1、詳細は<http://www.jamstec.go.jp/frcg/research/d1/iod/>を参照)

5) インド洋側にダイポールモード現象が起き、太平洋側でラニーニャからエルニーニョに向かう時には西太平洋に強い台風を生む風の分布が整う。またラニーニャの影響で西太平洋熱帯域の海水温もまだ高いことから、台風の当たり年になることが多い(図2)。この意味でも警戒が必要である。

図1

## 2006年の夏、秋、冬、の予測実験 (2006年4月1日に2006年6月から2007年2月までを予測)

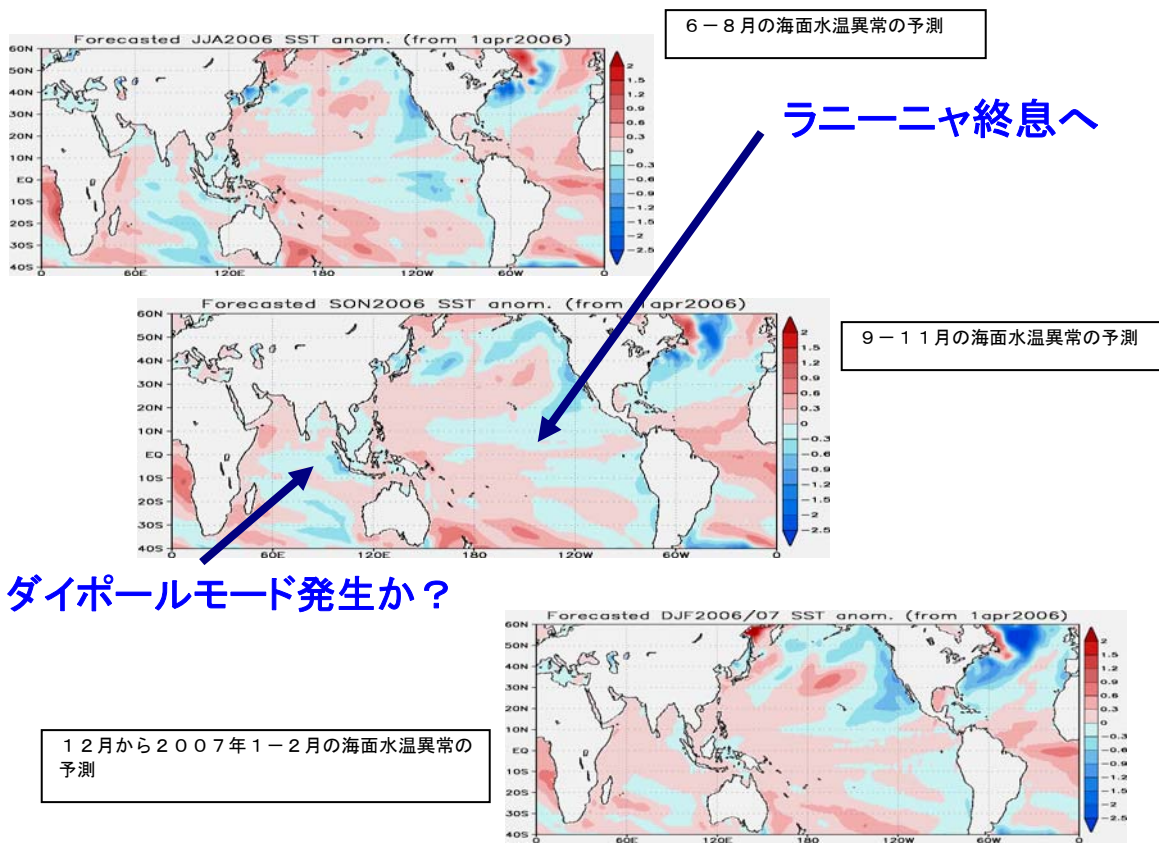


図2

台風発生数の積算統計を気候変動要素現象で分類  
(赤線は平年値を示している)

台風発生数と気候変動要素現象との関係  
(E:エルニーニョ, L:ラニーニャ, D:ダイポール)

